

『AMA展-Amagasaki Meets Art-』  
対話型鑑賞レポート

ASP学科2回生 佐伯香菜

実施日時：11月19日（土）14:00～15:30

場所：AMA展1階・地下会場



AMA展とは、大正15年に警察署として建設され、後に児童館などとしても再利用されてきた旧尼崎警察署を会場に行なわれた展覧会です。阪神・淡路大震災を経て、今なお保存されている建物を舞台に、地下の留置場跡など、場所の特性を活かしながら13人のアーティストが展示を行いました。

展覧会も終盤にさしかかった19日の土曜日、来場者を対象に京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース学科の学生4名（似内、山田、河原、佐伯）が、出品作品を用いた対話型鑑賞（以下：ACOP）を実施しました。学生たちはサポートスタッフとしてもこの展覧会に携わっており、その縁で学生のナビゲーションによる展示作品のACOPが実現することになりました。

当日はあいにくの天気のため、鑑賞への一般参加者の方は5人と少なかったのですが、鑑賞には作家さん数名も加わることになり、展示会場の広さを考えれば結果的にはちょうどいい人数でした。参加される方々は、全員ACOP未経験者のため似内さんがACOPの説明を念入りに行ないます。



説明後、最初にみんなで鑑賞したのは古川千咲さんの作品です。多くの方が、初めは賑やかな印象をもっていました。みんなでよくみてみるといろいろな要素が描かれていることに気付いていきます。細かく一つ一つの要素をみていくうちに、怖さ、2つの視点、賑やかさとは対照的なシンプルな部分など、様々なことを感じることが出来ました。実は作家さん本人もこっそりこの鑑賞の様子を聞いていました。観賞後、作家の古川さんから「最初は自分がねらっていた様なことをみんなが言っていたけど、だんだんみんなの想像がふくらんで、自分から作品が離れていくような感じがして、おもしろかった」との感想をいただきました。



次に、北條裕人さんの作品を3回生の山田さんのナビゲーションで鑑賞しました。最初は作品を餅や卵のように見立てていましたが、みていく内に、乾いたような表面の亀裂が、新しいなにかの誕生を思わせたり、鑑賞者が神のような気分で見下ろしているように感じてくるなど、最初には思いもしなかった意見が出てきました。一人でみるのではなく、大勢の人がいて、話していくからこそ出て来る意見がたくさん聞けて、とても充実した鑑賞になりました。



最後は、室諭志さんの作品。この作品は地下の暗い部屋に展示されています。最初の一つ一つの四角に着目して話していましたが、しかし、鑑賞が進み、昔、その場所（地下）が牢屋として使われていたという事実を意識して作品をみるようになると、独房に入っている犯罪者の生活と、この作品を重ねて想像するようになり、鑑賞者の想像は深まっていきました。観賞後、作家さんは「自分の予想以上に、見方が展示の環境に影響されていて、意図していなかった作品の意味に気付けた」とおっしゃっていました。

スクリーンに作品画像を投影して行なうACOPと違い、実際の作品を生でみながらのACOPは、色々な角度から、細部に至るまで作品をみることができました。また、ACOPを知らない人たちに、その存在を知ってもらう機会ともなりました。

学生のナビゲーションによる展示作品のACOPでしたが、ナビゲーションをおこなった私たちも、鑑賞に参加してくださったお客さんも、作品をつくった作家さんも、みんなが楽しめる鑑賞会になったのではないかと思います。

---

#### 【出品作家】

浅野 夕紀、井上 涼、小笠原 周、川上 大介、川北 ゆう、北野 諒、小宮 太郎、坂井 良太、田中 幹、藤井 まり子、古田 千咲、北條 裕人、室 諭志

#### 【関連プログラム】

- ライブパフォーマンス「TIME PAINTING at 旧尼崎警察署」
- 出品作家によるAMA展ツアー
- 近代建築保存活用シンポジウム第2回
- 第13回あまがさき市民まちづくりフォーラム 発表会

photo by 横山大介